

1つのアディル、それぞれのアディル ——研究大会1日目・共通論題シンポジウムから——

山本博之

2008年12月6日と7日の両日、獨協大学で日本マレーシア研究会(JAMS)の第17回研究大会が行われた。1日目の共通論題では、「“アディル”(公正)をとおしてみたマレーシア、インドネシアの社会」と題するシンポジウムが行われ、「アディル」(公正/正義)概念をめぐって歴史的・通地的な検討が行われた¹。

なお、マレー・インドネシア語における「アディル」は形容詞であり、名詞として用いるならばその派生語である「クアディラン」を用いるべきであるが、ここでは便宜上アディルとクアディランを厳密に区別せず、どちらも名詞のように扱うことにする。

*

現代的な関心から見たとき、この課題の背景には、近年のインドネシアとマレーシアで党名に「クアディラン」を掲げる改革派政党が勢力を伸ばしていることへの関心がある。インドネシアの福祉正義党(PKS)とマレーシアの人民公正党(PKR)は、日本語文献では「正義党」と「公正党」と訳し分けられることもあるが、いずれもクアディランを掲げる政党であり、しかも1998年頃のレフォルマシ(改革)運動と同時期に政党として結成されたという共通点もある。このシンポジウムは、この現代的な関心を念頭に置いた上で、単に現代のマレーシア

とインドネシアを並べた比較にとどまらず、中東におけるアドル(公正)概念が東南アジアにもたらされ、在地社会に定着していく歴史的な過程を踏まえた上で捉えようとするものであり、マレーシアを主軸に近隣地域の研究者が集う場としてのJAMSの特長が十分に生かされたたいへん魅力的なテーマである。

*

西尾寛治(防衛大学校)による趣旨説明の後、セッション1では新井和広(慶應義塾大学)による「中東社会における公正(アドル)概念」および西尾寛治による「近世のマレー世界における公正(アディル)概念」の2つの報告と質疑応答が行われた。中東地域ではアドルが政治と経済の両面で追及されたのに対し、東南アジア海域世界にもたらされたアディル概念はもっぱら政治的な文脈で問題となった。東南アジア海域世界では伝統的に「ザリム」(不正/暴虐)な支配者に臣民が敵対することは許されていなかったが、17世紀にはイスラム教の浸透に伴って王権概念が相対化され、18世紀以降には社会秩序に対する関心が高まった。

セッション2では、篠崎香織(在マレーシア日本国大使館専門調査員)による「マレーシアにおける「公正」を支える論理的根拠の変遷」および見市建(岩手県立大学)による「インドネシアの福祉正義党(PKS)による「正義」の実践」の2つの報告が行われた。マレーシアでは、民族(バンサ)別政党の連合体である国民戦線(BN)がアディルの担い手を自任し、他方

¹ このシンポジウムは、京都大学地域研究統合情報センターの共同研究「公共領域としての地域研究の可能性——東南アジア海域世界における「福祉」の展開を事例として」(研究代表者:西尾寛治)の研究成果の1つとして行われた。

で民族別政党への対抗勢力である人民公正党がアディルを掲げており、いずれの勢力にも政権に就くことによってアディルを実現しようとする発想がある。インドネシアでは、1970年代末以降の大学キャンパスにおける宣教活動やムスリム同胞団への傾倒などを背景に結成された正義党が福祉正義党へと発展した。1999年以降の選挙キャンペーンや党指針を分析すると、福祉正義党はイスラム的価値に基づくナショナリスト政党として捉えることができる。

これに対し、討論者の弘末雅士（立教大学）および井口由布（立命館アジア太平洋大学）からのコメントを受けた上で、フロアの参加者を交えた総合討論が行われた。主な質問やコメントには以下のようなものがあった。

アディル概念の核となるのは何か、普遍的な公正／正義概念なのか、それともイスラム的な価値なのか。また、市場経済化やグローバル化に対する反応との関わりはないのか。

中東のアドル概念との比較に関して、中東ではアドルを失う要因の1つとして淫欲が挙げられているが、東南アジア（少なくともインドネシア）では淫欲は力の源泉として捉えられており、それによってアディルが失われることはなく、この違いをどのように考えればよいか。

インドネシアには戦わずとも立ち上がるだけで世の中が変わるというラトゥ・アディル（正義王）概念があり、インドネシア共産党は新聞を通じてラトゥ・アディル概念を広めたが、マレーシアではイスラム的文脈を離れたアディル概念の展開は1998年まで見られなかったのか。

インドネシアの福祉正義党はイスラム的価値を掲げてはいるものの、その内実は見市報告の通りきわめて近代的であり、実は近代化のプロ

セスとして見ることはできるのではないか。

インドネシアの国家原則であるパンチャシラに社会正義（クアディラン・ソシアル）が挙げられ、インドネシア共和国憲法にも同じ言葉が出てくるように、クアディラン（アディル）はインドネシアにおける基本概念である。見市報告の意義は、社会におけるパンチャシラの重みが増す一方でパンチャシラにない新しい用法がアディルに含まれるようになってきた点を明らかにしたところにある。

マレーシアとインドネシアでクアディランが「正義」と「公正」に訳し分けられていることと関連して、「アディルとは何か」ではなく「アディルを実践するのは誰か」との観点からこの問題を捉えてはどうか。現代のアディル概念に関して、マレーシアでは社会秩序の管理を託された公権力がアディルであることが求められ、競合する政治勢力は公権力を自らの手にすることでアディルを実現しようとするが、これに対してインドネシアではアディルの実現が必ずしも公権力の掌握を必要とせず、私的な領域でのアディルの実践を含めて想定されているという違いが見られるのではないか。

*

このシンポジウムは多くの参加者の関心を集め、総合討論では非常に活発な議論が行われた。この成功の理由として、アディル概念を通じたマレーシアとインドネシアの比較という企画の目の付けどころのよさが挙げられるだろう。これは、専門とする分野や対象は異なっても、研究対象に関わるアディル概念の展開に多くの研究者が関心を持っていることを示している。この考えに立てば、それぞれの研究者が自分の研究事例に即したアディルに関する議論を持ち

寄ることを通じて、アディル概念の展開とその意味への理解がさらに深まることが期待される。

これに関連して、今号の会報で別に報告されるように、マレーシアで人民公正党の前身である国民公正党の結成の契機となった「レフォルマシ」(改革)運動から10年目を迎えたことを期に、「レフォルマシ」運動の前後に現地に滞在していたジャーナリストと地域研究者が当時を振り返るといふ公開セミナーもJAMS社会連携ウィングの主催で実施されている。このような研究の動きと連動することにより、「レフォルマシ」期以降のマレーシア・インドネシアの現代政治の展開とその意義に関する研究がより一層進むことだろう。

また、マレーシアとインドネシアでアディル概念が異なった発展を遂げているかに見える状況を考える上で、公正/正義概念を東南アジア内外の他地域の文脈において相対化しつつアディルの展開を考える可能性も考えられる。これについては、このシンポジウムを発展させる形で2009年6月7日に行われた東南アジア学会の第81回研究大会で行われたパネル「マレーシアにおけるアディル(公正/正義)概念の展開」で、フィリピン研究の宮脇聡史(東京基督教大学)を討論者に迎えるなどの工夫がされており、今後この方向でのさらなる展開が期待される。

*

最後に、筆者の関心に照らして、このシンポジウムから展開する研究の方向性の1つとして、アディル概念をそれぞれ異なる形で発展させてきたマレーシアとインドネシアが互いに交錯する分野でアディル概念がどのように表現されているかを見ることを通じて両国の関係を読み解く研究のあり方について記しておきたい。

インドネシアでは、1999年の住民投票を通じて2002年に東ティモールが独立して以来、領土的な一体性を失ったことに起因する不安感が高まっているように見える。ただし、2001年の9.11事件を契機とする「テロとの戦い」のため、国民感情を宥めるために米国を敵視することは、ムスリムが多数を占めるインドネシアを米国に敵対する「テロ国家」にしかねないという恐れもある。このような状況で、2002年には係争中だったシパダン島とリギタン島の領有権について国際司法裁判所がマレーシアの領有を認める判決を出し、これを1つの契機としてインドネシア国民の不満の矛先がマレーシアに向けられるようになった印象がある。

石油ガス鉱区開発をめぐるアンバラット海域に両国軍が艦船を派遣するなどの緊張の高まり、バティックや民謡などの文化的な遺産をマレーシアがインドネシアから盗んだとする文化「盗作」の訴え、そしてインドネシア人出稼ぎ労働者の扱いをめぐる両国の摩擦など、近年のマレーシアとインドネシアの摩擦の例は枚挙にいとまがない。これらの事例については、まず政治経済的な背景を明らかにすることが必要だが、それとともに、それぞれの事例が両国でどのように捉えられているかを、たとえばアディル概念との関連において明らかにすることにも意義があるように思われる。いろいろな面で共通性が高く、さまざまな形で交流が増えてはいるものの、マレーシアとインドネシアの間では十分なコミュニケーションが取れているとはいえない。これを、どちらか一方に過度に肩入れして他方を断罪するのではなく、まずそれぞれがどのように捉えているのかを把握することに意義があるように思う。